

## 科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成24年6月11日現在

機関番号：11401

研究種目：若手研究（B）

研究期間：2009年～2011年

課題番号：21720251

研究課題名（和文）漢唐間における都城構造の変化に関する研究

研究課題名（英文）Research on the changes in space distribution of palaces built during the period from the Han dynasty to the Tang dynasty

## 研究代表者

内田 昌功（UCHIDA MASANORI）

秋田大学・教育文化学部・准教授

研究者番号：50451654

研究成果の概要（和文）：秦漢期から唐代にかけての都城について、主として東西軸構造に注目しながら、空間構成の変化とその意味について検討した。従来、不明な点が多かった北周の長安の空間構成を復元し、漢唐間における都城史の展開の中に位置づけ、その画期性を明らかにした。また曹魏の鄴や北齊の鄴、あるいは北魏の洛陽からの影響が重視されてきた隋唐長安の形成について、北周の長安が直接の前身であるとする理解を提示した。

研究成果の概要（英文）：I researched changes in space distribution, mainly the structure of the east-west axis, and its cause in the palaces built during the period from the Qin and Han dynasties to the Tang dynasty. I mapped the space distribution in Chang'an palace of the Northern Zhou dynasty and found a radical change. I reevaluated it and positioned it in the history of palaces during this period. The Chang'an palace of the Sui and Tang dynasties is considered to have been built under the influence of the Ye palace of the Cao Wei and the Northern Qi dynasties or the Luoyang palace of the Northern Wei dynasty. But I advance a new theory that the Chang'an palace of Northern Zhou dynasty is the antecedent of the Chang'an palace of the Sui and Tang dynasties.

## 交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合計
2009年度	300,000	90,000	390,000
2010年度	200,000	60,000	260,000
2011年度	200,000	60,000	260,000
年度			
年度			
総計	700,000	210,000	910,000

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：史学・東洋史

キーワード：漢、魏晋南北朝、隋唐、都城、宮城、構造、空間配置、変化、東西軸

## 1. 研究開始当初の背景

|

都城研究が対象とする領域はきわめて広く、目的も多様である。その中で本研究が課題とするのは、都城、特に宮城の空間構成の分析とその背後にある政治状況や時代性の考察である。時代的には漢から唐までを主な対象とし、この時期の主要都城の形態とその変化の意味について考える。

以上のような研究目的・手法は目新しいものではなく、従来さかんに行われてきたものであり、すでに膨大な成果のもと、基本的なことは明らかにされている。こうした状況下で、報告者がこの研究を行った理由は二点ある。ひとつは近年、考古学分野における発見や研究の進展があり、新しい材料を用いて再検討することが可能になったことである。例えば北朝期の長安については、調査によって宮城の立地が特定されるとともに、いくつかの建築物の遺構も見つかり、資料が少なかつた北周長安の研究にとって大きな支援となっている。二点目は空間構成を分析する上で新しい手掛かりができたことである。これまでの研究では宮城の軸線として南北軸があることは知られていたが、近年になり東西方向にも軸線があったことが明らかになってきている。こうした新しい要素を研究に取り入れることで、これまでの研究をさらに発展させていくことが可能になってきている。

## 2. 研究の目的

漢唐間における都城の空間構成の変化に関する研究については、国内外で多様な観点から研究がなされ、すでに多くの成果が提出されている。中でも最も重要な成果は、楊寛『中国都城の起源と発展』(1987)である。楊寛は、先秦から唐代にかけての主要都城の空間構成を分析し、先秦以来の坐西朝東の構造が後漢の洛陽において坐北朝南へと変化したことを指摘し、ここに大きな画期があったことを認め、背景に重視する礼制の変化があったとする。この理解はその後の研究に基本的な枠組みを提供し、現在でも当該分野の研究の基礎となっている。

本研究課題も基本的には楊氏の研究を基礎に置くものである。ただしいくつかの点で補完・修正を試みたい。楊氏の研究では後漢の洛陽に画期性を認めるが、結果として隋唐長安の位置づけについて不十分な点が残る。後漢洛陽と隋唐長安を比較した場合、坐北朝南という点では共通するが、一方で異なる点も多く、隋唐長安の成立をどのように理解し、位置付けるのかという点が課題として残っている。この問題を考える上で手がかりになるのが、北周長安と宮城の東西軸である。

北周長安については史料的な問題から不明な点が多く残されており、都城史における

位置づけも十分になされていない状況にある。地理的にも時代的にも隋唐長安に最も近い位置にある北周長安についての理解の不足は、この時期の都城の変化や隋唐長安の成立過程を考える上で大きな障害となっている。しかし近年、北周長安に関する考古学的な調査が進展し、基礎的な考察をすることが可能になった。北周長安の空間構成がある程度分かれば、隋唐長安の成立をめぐる問題も大きく進展するはずである。

当該期の都城の変化について考える上で、もう一点手がかりになると思われるのは、宮城の東西軸構造である。報告者は魏晋南北朝期の諸宮城の空間構成について検討し、一様に主殿、東西堂、朝堂、雲龍・神虎門等の主要な構成要素が東西方向に展開する構造(東西軸構造)が存在することを確認した。東西軸構造は意思決定や日常の政務等が行われる場であり、皇帝の権威を象徴する南北軸とは、構造的・機能的に異なる性格を持つ軸線である。こうした東西軸構造は楊寛が指摘する坐西朝東の構造と一面で共通する性格を備えている。楊氏の研究では、後漢の洛陽を画期として都城の形態は坐西朝東から坐北朝南へと変化するが、坐西朝東の空間構成と魏晋南北朝の東西軸構造が関連があるとすれば、後漢洛陽の位置づけやその後の展開について再検討することも可能である。また隋唐長安の成立を、楊氏の理論の中にいかに積極的に位置付けるかという問題についても解決の手がかりが得られるように思われる。

東西軸構造は前漢においてすでに出現しており、その後魏晋南北朝をへて、隋唐長安において消滅する。一方で南北軸は時代が下るに従い存在感を強めていく。こうした二軸の変化は、意思決定のあり方や皇帝権の性格の変化と連動している推測されるが、これらの点が明らかになれば漢から唐に至る都城の展開や隋唐長安の形成過程について新しい理解を示すことができる。

以上の目的のもとで、本研究が具体的課題とするのは次の四点である。

(1) 当該期の主要都城の空間構成の復元を進める。特に不明な点の多い北周長安の基本的な空間構成を明らかにする。その他、南朝建康の朝堂の立地等、東西軸構造に関わる問題について個別に検討する。

(2) 上記(1)の成果に基づき、北周長安と隋唐長安を比較検討し、両者の関係を明らかにする。

(3) 東西軸構造の機能と性格を明らかにする。また漢唐間の主要都城における東西軸構造の変遷を明らかにする。

(4) 東西軸構造の変化について検討し、南北軸構造や皇帝権の変化を視野に入れながら、漢唐間における都城構造の変化の意味を明らかにする。

### 3. 研究の方法

(1) 文献資料の他、考古学の成果も用いながら主要な都城の空間構成について明らかにする。特に重点を置くのは次の二点である。

① 北周長安城の基本的な空間構成を明らかにする。北周長安は依然空間構成に不明な点が多く、主要な都城の中で唯一平面図が作成されていない。まずは文献資料と2003年の考古学的調査の成果によりながら、主殿、宮城正門、朝堂等の立地を特定し、基本的な空間構成を明らかにする。またその上で東西軸構造の形態や機能について検討する。

② 南朝の建康における朝堂の立地について検討する。南朝の建康についてはすでに基本構造は明らかにされており、複数の空間構成のモデルが示されている。しかし主要な宮殿や門については一致をみているものの、朝堂の立地については研究者によって見解が分かれている状況にある。朝堂は東西軸構造の構成要素であるだけでなく、隋唐長安の形成について考える上で重要な要素であり、立地と機能について検討する必要がある。

(2) 東西軸構造について、主に構造と機能の変遷について分析し、南北軸の動きとも比較しながら、漢唐間における都城の構造変化について検討する。

① 概略的にいえば、漢唐間の都城の変化は東西軸の縮小と南北軸の拡大として理解することができる。最初に主要な都城の南北軸と東西軸の形態についてそれぞれ具体的に示し、機能の変化等に注目しながらその変化の実態について検討する。

② 都城の東西軸と南北軸は、異なる時期に異なる要因のもとで成立した軸線と考えられる。二つの軸線がどのような原因で成立したのか検討し、その変化の意味を明らかにする。東西軸構造の変化は官制や皇帝権の性格の変化と密接していると予想される。これらの点に留意しながら都城空間の性格の変化について考える。

### 4. 研究成果

#### (1) 主要都城の空間構成に関する成果

##### ① 北周長安の空間構成に関して

###### ・ 宮正門の立地と構造の解明

文献資料と2003年に行われた楼閣台遺跡についての考古学調査の報告書をもとに、宮正門の立地と構造を明らかにした。楼閣台遺跡が宮正門の路門の遺構であり、それが宮殿と正門の両方の性格を持つ特殊な構造であることを明らかにした。こうした構造は北周による三朝制を基軸とする周礼型宮城の整備の結果出現したものであり、路門が正門と外朝の機能を備えることにより形成されたものである。

###### ・ 宮正門と周辺の空間構成の復元

北周長安宮の概略的な空間構成については2009年の論文の中で示したが、正門とその周辺についてより詳細な復元を行った。朝堂の立地や、隋唐長安の皇城の前身となる空間の形成等について明らかにした。

###### ・ 北周長安の宮城改革の実態の解明

北周の長安宮は魏晋以来の伝統的な宮城の構造を、『周礼』の宮城理念に従って改変したものである。具体的には東西軸上の雲龍門を南北軸上の宮正門に重ねるように二軸を統合し、南北軸に沿って三朝制を整備したものである。

##### ② 南朝建康の朝堂の立地に関する成果

朝堂は東西軸上の重要な構成要素だが、南朝建康の朝堂については先行研究で理解が分かれている状況にある。本研究においては、建康宮の基本史料の精読と朝堂の機能の分析から、朝堂は宮東側または東南で、雲龍門外にあったと推定した。ただし雲龍門外という点についてはまだ検討の余地があり、機能面の分析を中心に検討を継続している。

#### (2) 北周長安と隋唐長安の関係に関する成果

隋唐長安宮の形成過程については、曹魏の鄴、北魏の洛陽、北齊の鄴等の影響が強調されてきた。しかし(1)の成果により、三朝制の形態と機能、朝堂の立地、横街の存在、皇城等、隋唐長安宮に特徴的な要素が北周長安において出現していることがわかり、北周長安からの連続性が確認された。また北周長安の路門の構造が、隋唐長安の大明宮含元殿に継承されていることを明らかにした。

#### (3) 漢唐間における都城構造の変化に関する成果

漢以来、都城の空間構成の基礎となってきた南北軸と東西軸は、北周長安において南北軸に一元化され、この構造が隋唐長安へと継承される。北周長安は漢唐間における都城構造の大きな転換点として位置づけることができる。

#### 5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計1件)

①内田昌功「北周長安宮の路門と唐大明宮含元殿—殿門複合型建築の出現とその背景」(『歴史』第115輯、p1-19、2010年9月、査読あり)

[学会発表] (計2件)

①内田昌功「漢長安城内の楼閣台遺跡について」(2010年5月22日、秋田中国学会春季例会、秋田大学)

②内田昌功「南朝後期建康的朝堂布局」(2010年8月29日、第4届中国中古史青年学者国際研究会、台湾大学)

#### 6. 研究組織

##### (1) 研究代表者

内田 昌功 (UCHIDA MASANORI)  
秋田大学・教育文化学部・准教授  
研究者番号：50451654

##### (2) 研究分担者

( )

研究者番号：

##### (3) 連携研究者

( )

研究者番号：